

南インド伝統の衣装を着用

南インドのバンガロールは、「インドのシリコンバレー」とも呼ばれるIT産業をはじめとするハイテク産業の中心地であり、日本の多くの企業も進出している。

この都市は標高9200呎のデカン高原の南部の半乾燥気候地域にあり、年間を通して穏やかな気候で知られていて、日本にとっても重要な都市であるため、今では成田空港から直行便が出ているほ



どである。今回、今年1月に第22回アジア太平洋インプラント学会が3日間、バンガロールで開かれ、日本からは東北大学名誉教授の高橋哲先生をはじめ総勢5人の教授らが発表。私も英語での基調講演を20分間行った。閉会式では、今回の学会への貢献者らが壇上に呼ばれて、元々は王家の人が被っていたという格式の高い「マインソール・ペタ」というターバンと、ショールを着用。私も思いもかけず身に付けさせていただいた。その後、参加者全員でインド国歌を斉唱。



アジア太平洋インプラント学会閉会后、南インドの王が着用していたマインソール・ペタを着けて記念撮影。北村さんは前列右から2人目=北村さん提供

とても厳粛な雰囲気の中で、声高らかに会場中に響き渡る歌声には高揚感と共に万感胸に迫る思いがあった。

マインソール・ペタは元々南インドの14世紀末から20世紀中ごろにかけて存在したマインソール王朝で、王様が着用していた豪華なフォーマルターバンだそう。1948年にインドが独立して以来、この伝統的なマインソール・ペタはこの地域の文化遺産の象徴となり、フォーマルな場で着用されたり、名誉の印として著名な人々らに授けられるようになったそうである。

私は、とてもそれに値するような人間ではないが、今年は幸先良く1月からこの海外講演を通して、私のライフワークでもある国際医療協力がちよっぴりだげできたことに感謝している。

一方日本ではグローバルという言葉は一人歩きしているが、皆さんの心の中で「鎖国」していないだろうか？

「グローバル化」に

は他国に親友をつくるのが自分の経験からもとても有効であると考えている。言葉はそもそもコミュニケーションの最も重要な手段として生まれてきたものであり、今日では、「中学・高校の6年間

も英語を学んだにもかかわらず、ほとんどの日本人は英語がしゃべれない！」ことに来日した多くの私の友人たちは驚いて帰る。

日本の英語教育は、教師や生徒の多くが英語を学ぶ目的を受験にしている傾向が強く、その結果、授業は「つまらない」文法中心になってしまっていて、コミュニケーションに使えるようになる最も大切な音声学習の機会が極端に少なく、英語は受験で点数を稼ぐために、言葉は悪いが「悪用されている！」といっても過言ではない。

日本人が英語を話せるようになるには、これからの若者たちに英語でのコミュニケーションが「とても面白い！」と思ってもらえるような教育改革が、今の「日の沈む国」に急激に加速しつつある日本にとって、とても重要で優先課題であると考えている。

日本で最初に英語科ができた奈良市の高校で学んだ私は、交換留学生たちとの交流から「英会話はおもしろい！」ことを知ってしまったのがきっかけで、私の人生は、両親が付けてくれた名前のおり、とても豊かになったと自負している。

信州口腔外科インプラントセンター所長 (小布施町村)